大学生の進路選択セルフ・エフィカシーにおける強化要因についての概観

A Review of the Sources of Career Decision-Making Self-Efficacy among Undergraduates

前場　康介

MAEBA Kousuke

要　旨

本研究では、大学生における進路選択セルフ・エフィカシーに着目し、主として①セルフ・エフィカシーに影響を及ぼす情報源に基づいた介入研究、および②セルフ・エフィカシーの情報源における測定・評価方法、について概観した。その結果、大学生の進路選択 SE の向上を意図した情報源への介入研究はこれまで多様なものが報告されているが、その効果は未だ一貫していないことが明らかとなった。また、情報源を測定・評価するための尺度もいくつか開発されているが、測定対象や定量化できる情報源の種類が限局的であることなどが示唆された。このような課題を踏まえ、今後の研究において必要と考えられる要素について、各情報源における内容的・概念的異同の明確化や、サブグループの特性に合わせた介入内容のターゲット化、およびメッセージフレーミングをはじめとする他者資源の積極的活用などを挙げ考察した。

Abstract

This study discussed the career decision-making self-efficacy (SE) for undergraduates from the point of (1) previous studies investigating career interventions based on the sources of SE and (2) measurement or valuation of sources of SE. Results indicated that although several strategies or approaches have tried to enhance career decision-making SE for undergraduates, such manipulations were not always effective. Moreover, some measurements have been developed to evaluate the sources of career decision-making SE, yet their target or validity was still restricted. In the light of these issues, this study suggested the future directions as follows: (1) clarifying the contents or components of each source; (2) optimizing the intervention strategies for each target audience; (3) utilizing the “other-related” sources, such as message framing, to enhance career decision-making SE.

Ⅰ　はじめに

進路選択セルフ・エフィカシー (self-efficacy; 以下 SE とする) とは、「進路を選択・決定するにあたり、必要な課題をどの程度成功裏に達成することができるかについての見込み感」を指す (Betz, 2001)。SE という概念は Bandura (1977) によって提唱されたものであり、分野を問わず様々な行動変

容の先行要因として極めて重要な機能を果たすことが明らかにされている。すなわち、行動に先んじて SE が向上することで、後に続く当該行動の開始・継続が誘発されやすくなるのである。進路選択 SE と進路選択行動との関連を検討した多くの研究から、キャリア開発の分野においても同様の機能が認められている (柴田・安住, 2011; Gushue, Clarke, Pantzer, & Scanlan, 2006; 浦上, 1995)。

進路選択過程における SE 研究は、Hackett & Betz (1981) によってこの概念が当該領域に初めて適用されて以降、様々な観点から検討がなされてきた。この中で Lent, Brown & Hackett (1994) は、個人が職業もしくは進路についての関心を抱き、その選択を行い、望ましい結果を得るに至る一連のプロセスを理解する包括的な枠組みとして、社会認知的キャリア理論 (social cognitive career theory; 以下 SCCT とする) を提唱した **(Figure 1)**。

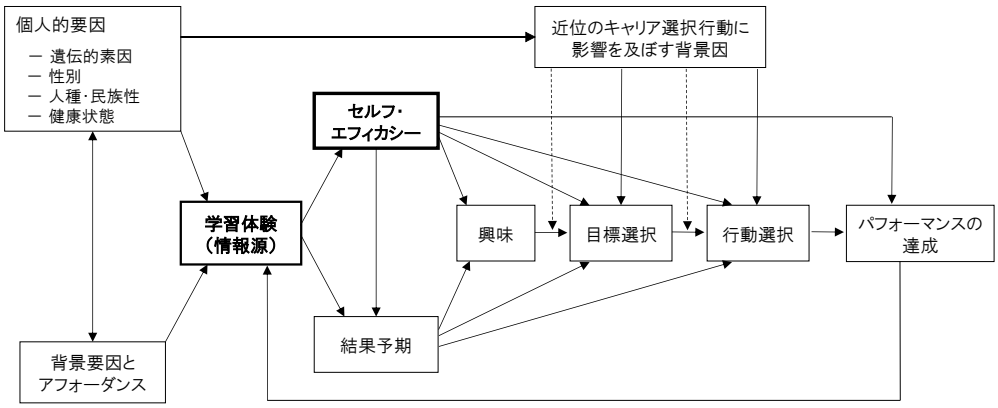

Figure1　社会認知的キャリア理論の概要 (Lent et al., 1994)

SCCT では、個人の特性やコンテクスト、関心や目標設定、選択行動など様々な変数を仮定しているが、ここでも SE は認知的・行動的要素の双方に影響を及ぼす重要な概念として位置づけられている。SE が有するこのような機能を前提として、進路選択 SE を意図的に強化することによってその後の進路選択行動を促進しようとする試みは、これまでに数多くなされてきた。しかしながら、富永 (2008) はこのような介入研究についての詳細な概説の中で､必ずしも一貫した効果が得られていないことを指摘している。そして、その原因の 1 つとして、SE を強化するための方略やその評価方法が各研究により異なっている点を挙げている。

そこで本論文では、大学生の進路選択 SE における強化要因に焦点を当て、これまでの先行研究についてその具体的な内容や測定・評価方法を含めて包括的に概観し、最適な介入方略を導くための要素について検討を行うことを主な目的とした。

Ⅱ　セルフ･エフィカシーに影響を及ぼす情報源と介入研究

Bandura (1977) によれば、SE は自然発生的に生じるものではなく、4 つの主要な情報源から影響を

受けるという。それらは、 1) 遂行行動の達成、2) 代理的体験、3) 言語的説得、および 4) 生理的・情動的喚起、である。SCCT においては、これらの情報源は「学習体験 (learning experiences)」と称されるが、内容は同様のものであり、進路選択 SE に重要な影響を及ぼすことが示されている。

「遂行行動の達成」とは、当該行動において個人がこれまでに有する実際の成功あるいは失敗体験である。このような体験は、遂行の程度に関する情報を直接的に付与するため、SE に最も強い影響を及ぼすと仮定されている。また、行行動の達成は客観的な成否のみならず、それに伴う個人の認知も含めて捉えるべき情報源である。「代理的体験」とは、当該行動を他者が行っている場面を観察することである。このような観察によって、「これなら自分にもできそうだ」または「あの人にできないのであれば、自分にもできないだろう」といった感覚が生じ、個人の SE に影響を及ぼす。観察するモデルは、個人と年齢や性別、当該能力などが類似している方がより影響力が強いとされ、また個人が尊敬している対象であっても、同様にその効果は大きくなる (Usher & Pajares, 2008)。さらに、自身が当該行動を実施している状況を想像することも、代理的体験として捉えられる。「言語的説得」とは、当該行動に関する情報や説得を、他者から言語的に得ることである。容易に用いることが可能な情報源であると仮定されているが、その一方、この情報源のみで強化された SE は消失しやすいことも指摘されている。このように、言語的説得は相対的に弱い影響しか有さないと考えられているが、遂行行動の達成や代理的体験といった他の情報源とともに提示されることで、効果は大きくなる (Bandura, 1997)。さらに、代理的体験と同様、提供するモデルによってその影響力が異なると考えられている (Usher & Pajares, 2008)。

最後に、「生理的・情動的喚起」とは、当該行動に付随して生じる身体的・精神的変化を指す。例えば、疲労や楽しさ、痛み、ストレス、不安、気分などであり、これらの状態を知覚することが SE に影響を及ぼす。

進路選択 SE の向上を意図したこれまでの介入研究においても、概ねこれら 4 つの情報源を操作することで進路選択 SE の向上を図っている。Betz & Schifano (2000) は、女子大学生を対象として、Holland (1985) における 6 領域の職業活動内容の 1 つである「現実的」活動に対する SE に介入を行っている。修理や建築といった諸活動に対して、専門家によるデモンストレーション (代理的体験) や、対象者の成功体験の支援 (遂行行動の達成) など、情報源に基づいたプログラムを提供している。また、Sallivan & Mahalik (2000) は女性を対象とした 6 週間のグループカウンセリング・セッションに情報源の要素を含め、進路選択 SE の向上を図っている。我が国においても、例えば浦上 (1996) は進路選択意識の育成を意図したワークブックを用い、SE に対する効果について予備的に検討している。さらに長岡・松井・山田 (2001) は、教育実習を情報源とみなし、実習前後の進路選択 SE について比較検討を行っている。このほかにも、数多くの研究が情報源の操作に基づいた介入効果について調べている (Foltz & Luzzo, 1998; Luzzo & Day, 1999; Maples & Luzzo, 2005; Uffelman, Subich, Diegelman, Wagner, & Bardash, 2004; 下村, 2000)。

しかしながら、先に述べた通りこれらの介入効果については一貫していない。その原因の 1 つとし

て、介入内容が実際に意図した変数を操作できていたか否かの客観的な評価を欠いていることが挙げられる (Betz, 2007)。

Ⅲ 情報源の測定・評価方法

SE の情報源を測定する尺度は、主に児童生徒の教育・学習領域において開発されてきた。これまでに開発されている SE 情報源尺度の一覧を **Table 1** に示す。

Table 1 SE の情報源測定尺度開発に関する先行研究

尺度名	著者名（発行年）	調査対象	尺度内容
Math efficacy information Scale	富永 (2000)	大学 1 年生男子 97 名，女子 66 名	15 項目，5 件法．数学における SE 情報源を測定する．【モデリング】【言語的説得】【情動的喚起】の 3 因子構造である．
Sources of Math Efficacy Scale	Lent et al. (1991)	心理学専攻の大学生男子 53 名，女子 85 名	40 項目，10 件法．数学における SE 情報源を測定する．【遂行行動の達成】【代理的学習】【社会的説得】【情動的喚起 (Fennema-Sherman Math Anxiety Scale)】の 4 領域である．
高校生における数学のセルフ・エフィカシー情報源尺度	小田ら(1995)	高校 1,2,3 年生 976 名	20 項目．情報源の「有無」を 2 件法，「影響性」を 4 件法にて問う．数学における SE 情報源を測定する．【モデリング】【言語的説得】【情動的喚起】の 3 因子構造である．
糖尿病患者の食事管理に対する自己効力感刺激要因尺度	安酸 (1997)	詳細不明	16 項目，3 件法．糖尿病患者の食事自己管理における SE 情報源を測定する．【遂行行動の達成】【代理的体験】【言語的説得】【生理的・情動的状態】の 4 領域である．
Sources of Academic Self-Efficacy Scale	Hampton (1998)	学習障碍を有する，または有さない高校生男子 70 名，女子 76 名	46 項目．学業における SE 情報源を測定する．【遂行行動の達成】【代理的学習】【社会的説得】【情動的喚起】の 4 領域である．
Sources of Computer Self-Efficacy Scale	Smith (2001)	大学生男子 95 名，女子 115 名	Lent et al. (1991)の尺度を改変した，40 項目，5 件法．コンピュータ・スキルにおける SE 情報源を測定する．【遂行行動の達成】【代理的学習】【言語的説得】【情動的喚起】の 4 領域である．
Sources of social self-efficacy expectations scale	Anderson & Betz (2001)	大学生男子 204 名，女子 275 名	40 項目．社会的スキルに関する SE 情報源を測定する．【遂行行動の達成】【代理的学習】【社会的説得】【情動的喚起】の 4 因子構造である．
Sources of mathematics self-efficacy scale	Klassen (2004)	東南アジアおよびアングロカナディアンの Grade7 の学生男子 118 名，女子 152 名	Matsui et al. (1990)の尺度を改変した，15 項目，5 件法．数学における SE 情報源を測定する．【代理的体験】【言語的説得】【情動的喚起】の 3 因子構造である．
Sources of academic self-efficacy scale	Usher & Pajares (2006)	Grade 6 の中学生男子 123 名，女子 140 名	Lent et al. (1991; 1996)の尺度を改変した，24 項目，5 件法．学業における SE 情報源を測定する．【遂行行動の達成】【代理的学習】【言語的説得】【情動的喚起】の 4 因子構造である．
Sources of science self-efficacy scale	Brinter & Pajares (2006)	Grade 5-8 の中学生男子 155 名，女子 164 名	Lent et al. (1996)の尺度を改変．理科における SE 情報源を測定する．【遂行行動の達成】【代理的学習】【言語的説得】【情動的喚起】の 4 因子構造である．
Sources of writing self-efficacy scale	Pajares et al. (2007)	Grade 4-11 の小学生・中学生・高校生男子 623 名，女子 633 名	Lent et al. (1991; 1996)の尺度を改変した，28 項目，5 件法．国語における SE 情報源を測定する．【遂行行動の達成】【代理的学習】【言語的説得】【情動的喚起】の 4 因子構造である．
糖尿病患者のフットケアに対する自己効力感刺激要因尺度	畑野ら (2007)	糖尿病患者女性 7 名	安酸 (1997)の尺度を改変した，16 項目，3 件法．糖尿病患者のフットケアにおける SE 情報源を測定する．【遂行行動の達成】【代理的体験】【言語的説得】【生理的・情動的状態】の 4 領域としている．
Sources of self-efficacy in mathematics scale	Usher & Pajares (2009)	Grade 6-8 の中学生 2738 名	学業場面におけるこれまでの情報源尺度をレビューしたうえで作成された．24 項目，6 件法．【遂行行動の達成】【代理的体験】【社会的説得】【生理的喚起】の 4 因子構造である．
Sources of Exercise Efficacy Scale (SEES)	前場ら (2011)	60 歳以上の高齢者 347 名	20 項目，5 件法．高齢者における運動 SE 情報源を測定する．【遂行行動の達成】【代理的体験】【言語的説得】【生理的・情動的喚起】の 4 因子構造である．
進路選択の際の影響要因を問う質問項目	富永 (2000)	女子大学生 145 名	7 件法．【言語的説得】および【代理的体験】について，友達，先輩，家族，恋人からそれぞれどの程度影響を受けたかを問う．
Leaning Experiences Quastionnaire (LEQ)	Schaub (2004)	詳細不明	120 項目，6 件法．Holland (1985)による 6 職業領域について，【遂行行動の達成】【代理的体験】【言語的説得】【情動的喚起】の 4 因子をそれぞれ測定する．
仕事活動における情報源を問う質問項目	安達 (2006)	大学生 355 名	18 項目，5 件法．Holland (1985)による 6 職業領域について，【個人的達成】【代理的体験】【言語的説得】に関する項目に回答する．
就職活動における遂行行動の達成、代理的体験、言語的説得尺度	佐藤 (2013)	就職活動を経験した大学 4 年生 223 名	計 74 項目，4 件法．就職活動における【遂行行動の達成】【代理的体験】【言語的説得】それぞれの尺度を用いて測定する．

古くは Matsui, Matsui, & Ohnishi (1990) や Lent, Lopez, & Bieschke (1991) によって数学の SE 情報源尺度が開発されており、これらの尺度は以降多くの類似する情報源尺度の基礎となっている (Brinter & Pajares, 2006; Klassen, 2004; Pajares, Johnson, & Usher, 2007)。各尺度の因子構造については、概ね Bandura (1977) の定義した情報源を反映した 4 因子構造であるが、遂行行動の達成を除いた 3 因子から成る尺度も存在する (Klassen, 2004; Matsui et al., 1990)。こうした尺度においては、遂行行動の達成が各個人のテスト得点を反映させることで測定されている。しかしながら、遂行行動の達成は実際の行動のみを指すのではなく、個人の主観的な認知も包括するものであるため、このような方法論に対する批判もある (Usher & Pajares, 2008)。また、各項目への回答方法として、小田・嶋田・森・三浦・坂野 (1995) は、情報源の「有無」についての問い (2 件法)、および情報源の「影響性」についての問い (4 件法)、という 2 つの形式を採用している。この方法は、SE の情報源をより厳密に測定するための有用な手段であると考えられる。

教育・学習領域以外のものとして、安酸 (1997) や畑野・坂本・鈴木 (2007) は糖尿病患者の疾患管理に関する情報源尺度を開発しており、その臨床的応用へ結びつけている。また Anderson & Betz (2001) は社会的スキルに関する情報源尺度を作成している。さらに、前場・藤澤・満石・飯尾・竹中 (2011) は高齢者を対象とした運動における情報源尺度を開発し、諸変数との関連について横断的な検討を展開している (前場・竹中, 2012)。

進路選択 SE についても、その情報源を測定・評価する尺度がこれまでにいくつか開発されている (**Table 1** 下部参照)。情報源を具体的な測定対象とみなし、進路選択 SE との関連を検討した研究として、富永 (2000) による研究が挙げられる。この研究では、女子大学の 4 年生を対象に進路選択行動への影響要因として代理的体験および言語的説得を仮定し、それらの測定を行っている。具体的には、友人、先輩、家族、および恋人という 4 つの対象それぞれから、生き方のモデルとしての影響、および助言をどの程度受けたかについて、7 件法にて回答を求めている。

Schaub (2004) は、Holland (1985) が提唱した 6 つの職業領域 (現実的、研究的、芸術的、社会的、企業的、および慣習的) それぞれについて、4 つの情報源に基づく経験をどの程度得ているか、合計 120 項目を設定して測定を試みている。この尺度は Learning Experiences Questionnaire (LEQ) と呼ばれ、項目例としては「家の周りの修理をしたことがある (現実的－遂行行動の達成)」、「幼い頃から、尊敬する大人たちが学術論文を読んでいる場面を見てきた (研究的－代理的体験)」、「尊敬する大人たちから、楽器を演奏するよう励まされた (芸術的－言語的説得)」、および「知らない人と会話をするとき、よく不安になっていた (社会的－生理的・情動的喚起)」などが挙げられる。さらに Schaub & Tokar (2005) は、LEQ を用いて情報源およびパーソナリティ傾向が個人の進路選択における SE や結果予期、および意図にもたらす影響について、SCCT に基づいた検討を行っている。

安達 (2006) も同様に、Holland (1985) を提示し、各領域の活動内容について、1) 「この様な活動はよく経験して来たし、ある程度上手にできた」 (遂行行動の達成)、2) 「自分が経験するか否かは

さておき、身近な人が上手にやるのを見て来た」 (代理的体験)、および 3) 「この様な活動について身近な人からほめられたり勧められたりしてきた」 (言語的説得) という質問項目を設定して、それぞれの程度について評価する方法をとっている。なお、生理的・情動的喚起については、特性不安 (清水・今栄, 1981) およびオプティミズム傾向 (戸ケ崎・坂野, 1993) を測定することで評価している。

さらに佐藤 (2013) は、大学 4 年生を対象として、遂行行動の達成、代理的体験、および言語的説得の 3 情報源それぞれについて尺度の作成を行っている。遂行行動の達成尺度は「就職活動中の成功」、「就職活動の遂行」、「志望明確化」、および「就職活動中の失敗」からなる 4 因子構造、言語的説得尺度は「家族外説得」、「家族説得」、および「アドバイス」からなる 3 因子構造である。なお、代理的体験尺度については 1 因子構造 (「モデリング」因子) である。具体的な項目例は、遂行行動の達成として「志望する業界を絞り込むことができた」、「自分の長所を理解した」、代理的体験として「就職活動中に知り合った社会人に、就職活動の方法を聞いた」、「先輩に職業観を聞いた」、言語的説得として「自分の志望する職種について、向いていると友人から勧められた」、「家族から、就職活動についてアドバイスを受けた」などである。

以上のように、他の領域と比較しても、進路選択過程における SE の情報源尺度は相対的に多くのものが開発されているといえる。SE に影響を及ぼす情報源を詳細に検討することは極めて重要な課題であるにも関わらず、それを主題に据えた研究が驚くほど少ないこと (Betz, 2007) を考慮すれば、これらの研究はキャリア開発において意義深い知見をもたらす。しかしながら、信頼性および妥当性の検証が十分ではなく標準化された尺度であるとは言い難いこと、他の研究において信頼性の低さがいくつか報告されていること、尺度を適用できる対象が限定されていること、といった問題も残されている。各尺度の適用可能性とその限界を十分吟味しながら、今後も情報源の定量化によって明らかにできる知見を蓄積していくことが必要であると考えられる。

Ⅳ おわりに

以上、本論文では大学生の進路選択 SE における主要な強化要因である情報源に焦点を当て、主にその操作を通した介入方略と測定・評価方法という観点から検討を行った。以下、今後の研究において必要と考えられる要素について、いくつか提案を行いたい。

介入による効果が一貫していない点については、適用された介入方略が実際に意図した情報源を適切に強化できているか否かが不明確である点が 1 つの原因であると予想される。例えば「就職活動を経験した先輩の話を聞く」という内容を、介入者が代理的体験を意図した情報源として提供しても、それが言語によって伝達されるのであれば、被介入者には言語的説得として受け取られるかもしれない。このように、情報源において内容的、概念的な重複が生じることは Usher & Pajares (2008) も指摘しており、上述した尺度において各情報源間の相関係数が相対的に高いことを考慮しても、これらを弁別する難しさを表しているといえる。

この点について、Zinken, Cradock, & Skinner (2008) は概念的異同を明確にするために「情報源の補完モデル」を提唱している。このモデルでは、SE の情報源における関連について、自己 (Self) －他者 (Other)、および行為 (Action) －評価 (Appraisal) という二軸を交差させたうえで言及し、各情報源を位置づけている (**Figure 2**)。この位置づけに従えば、介入方略の立案からその内容、実施、評価に至るまで、より一貫した精度の高い研究を行うことが可能になると考えられる。

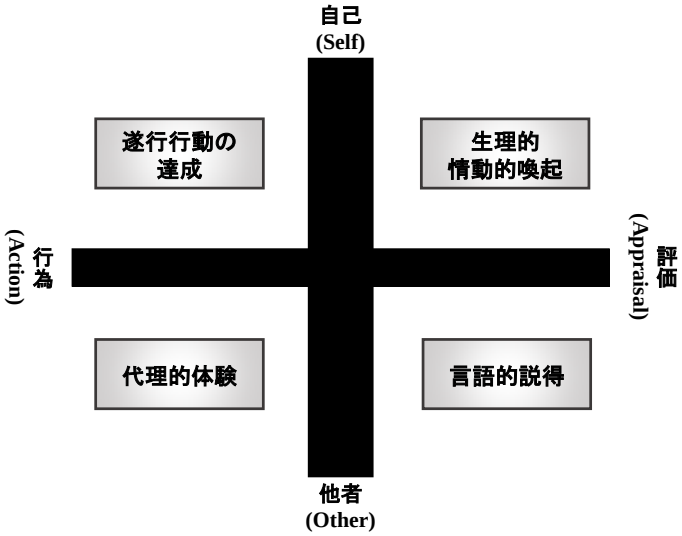

Figure2 情報源の補完モデル (Zinken et al., 2008)

さらに、この補完モデルを適用することで、性別や年齢、大学の年次や専攻といった、より詳細なサブグループにおける情報源の特徴を把握しやすくなるという利点もある。例えば前場・竹中 (2011) は中高齢者の運動SEを対象として、このモデルに基づいて各情報源のクラスタパターンを弁別している。Kreuter, Farrell, Olevitch, & Brennan (1999) およびKreuter & Wray (2003) によれば、サブグループの特徴に合わせた介入は、対象となる集団の特徴に基づいたより適合的なフィードバックを提供することができ、広く一律に同様の情報を提供する一般化コミュニケーションと比べて介入効果が大きいことを明らかにしている。このようなアプローチは「ターゲット化コミュニケーション」と呼ばれ、共通の枠組みを持つ対象者を限定することを目的として、主に人口統計学的変数を基準に対象者を分割するものである。各サブグループに属する人々に対し、そのグループに最適と考えられる内容に特化した共通の介入方略を提供するが、このようなアプローチは大学生の進路選択SEを強化する場合にも考慮すべきものである。

進路選択SEにおける情報源について今1つ考慮すべき課題は、遂行行動の達成を情報源として活用しにくいという点である。すなわち、大学生の進路選択過程においては、例えば受験や就職活動など実際の進路選択行動をとる機会は限られており、ゆえに遂行行動の達成として機能するような経験自

体をほとんどの個人が有していないのである (浦上, 1993)。佐藤 (2013) はこの点に着目し、実際の就職活動経験が進路選択SEに及ぼす影響を検討している。これまでの関連研究のほとんどが、SEを先行要因とみなして就職活動経験以前の大学生を対象としている点を考慮しても、SEと就職活動の相互影響性という観点から行われた本研究は極めて有用な知見をもたらしている。しかしながら、この研究においては対象が大学4年生に限定されており、広く大学生全般にその知見を適用することは困難である。また、キャリアセミナーやインターンシップ、あるいはアルバイトなど、就職活動や職務における疑似体験とも呼ぶべき機会は近年増加しており、このような経験を遂行行動の達成として扱った研究も存在する。しかしながら、結果として個人のSEに有意な影響を与えていなかったとする報告もあり、これらの経験が進路選択における遂行行動として適切か否かについてはなお検討の余地がある。

このような現状を踏まえると、特に他者 (Other) に基づいた情報源の提供がより重要な意味を持つと考えられる。例えば辻川 (2008) は、大学における前年度の就職活動体験報告のうち、内定獲得者10名の文章を抜粋し、その熟読を代理的体験の介入方略として用いている。その結果、進路選択SE尺度における「問題解決」因子や「状況適応」因子といった、目標行動達成志向に係る因子の得点が向上したことを報告している。さらに、Tansley, Jome, Hasse & Martens (2007) は大学生の進路選択SE対しして、内容は同質であるが言い回しを変えた説得的メッセージがどのような影響を与えるかについて検討している。具体的には、gain-frame (利益を強調した言い回し) およびloss-frame (損失を強調した言い回し) によるメッセージを用い、いずれも進路選択SEに影響はみられなかったものの、loss-frameによるメッセージを受けた対象者は一週間後により積極的な進路選択行動を行っていたことを報告している。あくまで一例であるが、こうした研究は進路選択SEの向上における他者資源の活用や、その介入内容のより詳細な検討の意義について示したものといえる。

大学生の進路選択は種々の要因が複雑に絡み合った過程であり、これまでに様々な領域あるいは観点から研究がなされてきた。その中で、近年の報告によると、*Journal of Vocational Behavior* などキャリア開発に係る複数の主要雑誌に掲載された研究のうち、およそ 11%の論文で SE に関連した研究が行われているという (Gore, 2006)。このことから、今後の進路選択研究においてもなお SE が重要な変数となることは疑いの余地がない。情報源の詳細な検討を含め、引き続き SE の観点から大学生の進路選択における多様な研究が発展していくことが望まれる。

引用文献

安達智子 (2006). 大学生の仕事活動に対する自己効力の規定要因. キャリア教育研究, **24**, 1-10.

Anderson, S.L. & Betz, N.E. Sources of social self-efficacy expectations: their measurement and relation to career development. *Journal of Vocational Behavior*, **58**, 98-117.

Bandura, A. (1977). Self-efficacy: toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.

Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: the exercise of control*. New York, Freeman & Company.

Betz, N. E. (2001). Career self-efficacy. In: Frederick, T. L. Leong., & Barak, A. (Eds.) *Contemporary models in vocational psychology: a volume in honor of Samuel H. Osipow*. New Jersey, Lawrence Erlbaum Associates.

Betz, N. E. (2007). Career self-efficacy: exemplary recent research and emerging directions. *Journal of career assessment*, **15**, 403-422.

Betz, N. E. & Schifano, R. (2000). Evaluation of an intervention to increase Realistic self-efficacy in college women. *Journal of Vocational Behavior*, **56**, 35-52.

Brinter, S.L. & Pajares, F. (2006). Sources of science self-efficacy beliefs of middle school students. *Journal of Research in Science Teaching*, **43**, 485-499.

Foltz, B. & Luzzo, D. (1998). Increasing the career decision making self-efficacy of nontraditional college students. *Journal of College Counseling*, **1**, 35-44.

Gore, P. A. (2006). Academic Self-efficacy as a predictor of college outcomes. *Journal of Career Assessment*, **14**, 92-115.

Gushue, G. V., Clarke, C. P., Pantzer, K. M., & Scanlan, K. R. (2006). Self-efficacy, perception of barriers, vocational identity, and the career exploration behavior of Latino/ a high school students. *Career Development Quarterly*, **54**, 307-317.

Hackett, G. & Betz, N. E. (1981). A self-efficacy approach to the career development of women. *Journal of Vocational Behavior*, **18**, 326-336.

畑野富美・坂本由希子・鈴木幸子 (2007). 糖尿病患者への足浴とフットケア教育により得られる精神的効果の検討. 日本医学看護学教育学会誌, **16**, 52-58.

Holland, J. L. (1985). *Making vocational choices: A theory of vocational personalities and work environments*. New Jersey, Prentice-Hall.

Klassen, R.M. (2004). A cross-cultural investigation of the efficacy beliefs of South Asian immigrant and Anglo Canadian nonimmigrant early adolescents. *Journal of Educational Psychology*, **96**, 731-742.

Kreuter, M., Strecher, J.V., & Glassman, B. (1999). One size does not fit all: The case for tailoring print materials. *Annals of Behavioral Medicine*, **21**, 276-283.

Kreuter, M. & Wray, R. J. (2003). Tailored and targeted health communication: strategies for enhancing information relevance. *American Journal of Health Behavior*, **27**, S227-S232.

Lent, R. W., Brown, S. D., & Hackett, G. (1994). Toward a unifying social cognitive theory of career and academic interest, choice, and performance. *Journal of Vocational Behavior*, **45**, 79-122.

Lent, R. W., Lopez, F. & Bieschke, K. (1991). Mathematics self-efficacy: Sources and relation to science-based career choice. *Journal of Counseling Psychology*, **38**, 424-430.

Luzzo, D. & Day, M. A. (1999). Effects of Strong Interest Inventory feedback on career decision making self-efficacy and social cognitive career beliefs. *Journal of Career Assessment*, **7**, 1-17.

前場康介・藤澤雄太・満石　寿・飯尾美沙・竹中晃二 (2011). 高齢者の転倒恐怖と身体活動を関連づける要因の検討 −ミディエータとしての転倒関連セルフ・エフィカシーの役割−. 老年社会科学, **32**, 405-412.

前場康介・竹中晃二 (2011). 中・高齢者における運動セルフ・エフィカシー情報源の特徴 −クラスタ分析に基づく検討−. 老年社会科学, **33**, 575-584.

前場康介・竹中晃二 (2012). 高齢者における運動セルフ・エフィカシーの情報源および運動変容ステージとの関連. 行動医学研究, **18**, 12-18.

Maples, M. R. & Luzzo, D. (2005). Evaluating DISCOVER's effectiveness in enhancing college students' social cognitive career development. *Career Development Quarterly*, **53**, 274-285.

Matsui, T., Matsui, K., & Ohnishi, R. (1990). Mechanisms underlying math self-efficacy learning of college students. *Journal of Vocational Behavior*, **37**, 225-238.

長岡　大・松井賢二・山田亮 (2001). 大学生の進路選択に対する自己効力と進路（キャリア）成熟. 進路指導研究, **20**, 11-20.

小田美穂子・嶋田洋徳・森　治子・三浦正江・坂野雄二 (1995). 高校生における数学のセルフ・エフィカシー情報源の測定. 日本心理学会第 59 回大会発表論文集, 413.

Pajares, F., Johnson, M.J., & Usher, E.L. (2007). Sources of writing self-efficacy beliefs of elementary, middle, and high school students. *Research in the Teaching of English*, **42**, 104-120.

佐藤　舞 (2013). 進路選択過程に対する自己効力と就職活動における情報源との関連. 応用心理学研究, **38**, 251-262.

Schaub, M. (2004). Social cognitive theory: Examining the mediating role of sociocognitive variables in the relation of personality to vocational interests. *Dissertation Abstract International*, **64**, 7-A.

Schaub, M. & Tokar, D. (2005). The role of personality and learning experiences in social cognitive career theory. *Journal of Vocational Behavior*, **66**, 304-325.

柴田由己・安住伸子 (2011). 女子大学生の進路選択に対する自己効力と進路探索行動 −進路選択過程としての就職活動に着目して−. キャリア教育研究, **29**, 71-80.

清水秀美・今栄国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY の日本語版（大学生用）の作成. 教育心理学研究, **29**, 348-353.

下村英雄 (2000). 自己分析課題がコンピュータによる情報検索及び進路選択に対する自己効力に与える影響. 進路指導研究, **20**, 9-20.

Sullivan, K. & Mahalik, J. R. (2000). Increasing career self-efficacy for women: Evaluating a group intervention. *Journal of Counseling and Development*, **78**, 54-62.

Tansley, D. P., Jome, L. M., Hasse, R. F., & Martens, M. P. (2007). The effects of message framing on college students' career decision making. *Journal of Career Assessment*, **15**, 301-316.

戸ケ崎泰子・坂野雄二 (1993). オプティミストは健康か？. 健康心理学研究, **6**, 1-11.

富永美佐子 (2000). 女子大学生の進路選択過程における自己効力. 進路指導研究, **20**, 21-31.

富永美佐子 (2008). 進路選択自己効力に関する研究の現状と課題. キャリア教育研究, **25**, 97-111.

辻川典文 (2008). 進路選択過程に対する自己効力の因子構造と代理的体験の効果の検討. キャリア教育研究, **25**, 77-88.

Uffelman, R. A., Subich, L. M., Diegelman, N. M., Wagner, K. S., & Bardash, R. J. (2004). Effect of mode of interest

assessment on clients' career decision self-efficacy. *Journal of Career Assessment*, **12**, 366-380.

浦上昌則 (1993). 進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連. 教育心理学研究, **41**, 358-364.

浦上昌則 (1995). 女子大学生の進路選択に対する自己効力と進路不決断 −Taylor & Betz (1983) の追試的検討−. 進路指導研究, **16**, 40-45.

浦上昌則 (1996). 「進路選択に対する自己効力」の育成に関する予備的研究 −ワークブックを用いた育成法について−. 進路指導研究, **17**, 17-27.

Usher, E.L. & Pajares, F. (2008). Sources of self-efficacy in school: critical review of the literature and future directions. *Review of Educational Research*, **78**, 751-796.

安酸史子 (1997). 糖尿病患者教育と自己効力. 看護研究, **30**, 29-36.

Zinken, K.M., Cradock, S., & Skinner, T.C. (2008). Analysis System for Self-Efficacy Training (ASSET) Assessing treatment fidelity of self-management interventions. *Patient Education and Counseling*, **72**, 186-193.